

学校名	岐阜県川辺町立川辺中学校	執筆者名	相良 英優
研究タイトル	目標に向かって自走する組織の在り方 ～全員がリーダーとして活躍するチームを目指して～		

① **育てるべき資質や能力**・・・自分で設定した未来を担う子どもたちを育てるべき資質や能力について、その必要性を踏まえて記述する。

主に育成すべき資質/能力のキーワード

・自己解決力 ・集団と関わる力 ・仲間の能力を生かす力

情報技術の発展によって、誰もが発信者となり自己表現ができるようになった時代に生きる子どもたち。その中で、好きなことをして生きていくことに明るい未来を抱いている子どもも少なくないだろう。しかし、その未来を具現化する過程において、嫌いなことや苦手なことはやらなくてもよいというのは偏った考え方である。それらのようなことにも向き合い、努力して克服する姿勢はなくてはならない。「好きなことをして生きていく」という言葉が、自分が抱える困難から逃げる言い訳として使われないようにするためにも、目の前の状況を正しく判断する力や、その状況を受け入れ、自分なりの解決に向けて行動に移す力をもった子どもの育成、つまり、自己解決型の子どもの育成が必要だと考える。

また、コロナウイルスなどの影響による環境の変化や、経済的な要因、そして、情報技術などの技術的革新によって、先行きが不透明で、将来の予測が困難だと言われる現代。状況が目まぐるしく変わっていく中で、あらゆる変化が起きてから対応しているだけでは、追いつかなくなっていくのではないだろうか。これからは、次の変化を予測して自分たちで明確な目標を立てて活動したり、変化を利用して新たなもの生み出したりする力がより一層重要になっていくだろう。それらの力を求めていく中で、個の自己解決力を高めるだけでは対応可能な範囲もどこかで限界が来てしまう。なぜなら、どれだけその力を向上させても、その人の性格や得意、不得意などによって、できることとできないことは必ず存在するからである。

そんな中で、自分が好きなことをして生きていくには、自分にはない力をもった仲間の存在が必要不可欠となるはずである。つまり、目標を達成するためには組織として動くことが必要であり、その組織が一定以上の成果を出し続けるための仕組みづくりをしていかなければいけないということになる。そこで、自己解決力を高める中で、自分がどのような人間なのかを理解し、力の掛け算でより大きな成果を出すために、集団と関わる力や仲間の能力を生かす力も合わせて育てるべき能力だと考える。

社会に出ると、ほとんどの人が集団の中で自己を高め、集団の成長に貢献していかなければいけない環境に置かれると考える。そこで、ただ単に自分が集団の中で成長しようとするだけではなく、集団を成長させるために自分にできることを考えて行動に移せる子どもを育てたいという思いで教育活動に励んできた。その中でよく言葉にしてきたのは、「自分たちで変化していける学級を目指そう」である。これには、現状に満足しない生活を目指すと同時に、変化することを恐れずに活動してほしいという願いが込められている。また、それに伴って、「変人になろう」という言葉も同じように大切にしてきた。これには、「変われる人になる」という個人の成長に目を向けた意味と、「変えられる人になる」という集団の成長に目を向けた意味をもたせている。

これらの言葉や思いを学級経営の軸にしなが、上記に述べた能力を育てることで、1人1人が活躍しながら自走する組織の在り方に迫っていくこととする。

**② 子どもたちの現状・・・子どもたちの置かれている環境や状況、学習レベルなどを客観的に把握することによって収集した情報に基づき、子どもたちの現状について記述する。**

子どもたちの実態を把握するために、『文部科学省（2017） 中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別活動編』の中で記載されている特別活動の目標をもとにアンケートを作成した。アンケートの内容は、特別活動の目標から本実践で育てたい能力と関係が深いと考える「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の3つのキーワードを取り上げ、それぞれ3つずつ質問項目を用意した。1つの項目につき5点満点で自己評価してもらい、学年ごとに集計することで本校の子どもの実態把握を行った。

以下のアンケート結果は、令和5年7月に実施した各学年の平均値を示したものである。

**【表1 学校生活アンケートの結果】**

	【項目】	1年生		2年生		3年生	
人間関係形成	・互いによい関係を作るため、集団生活の重要性を理解し、社会的マナーに従った行動ができています。	4.51	4.42	4.03	4.07	4.57	4.44
	・異なる考えや立場の仲間を尊重し、支え合い協力することができています。	4.47		4.25		4.55	
	・仲間の価値観や個性を尊重し、新しい環境での可能性を引き出す関係を築こうとしている。	4.29		3.93		4.21	
社会参画	・協力して役割を果たす必要性を理解し、集団生活に貢献しています。	4.47	4.20	3.84	3.79	4.31	4.06
	・集団で決めた活動目標の達成のために、個人的な目標を決め、活動に移すことができています。	4.15		3.83		3.76	
	・自分の活動や役割を振り返ることで、成長や課題を認識し、集団生活の改善に生かそうとしている。	4.00		3.70		4.11	
自己実現	・社会的自立を目指し、個性を理解し活動に取り組むことができています。	4.10	4.12	3.77	3.85	4.15	4.19
	・集団の中で直面する課題に対して、必要な情報を収集、整理し、解決に向けて活動できています。	4.00		3.84		4.17	
	・自主的に生活を改善するとともに、自分らしい生き方を主体的に選択しようとしている。	4.26		3.93		4.25	

### ○「人間関係形成」の観点から

「人間関係形成」の観点は、集団を一定の基準で維持したり、集団の中で新たな価値を生み出したりする力を確認するための観点であり、本実践で育成を目指す「集団と関わる力」や「仲間の能力を生かす力」と関係が深いものとなる。

アンケート結果では、どの学年もこの観点の評価が高いことがわかる。項目ごとに見ても、「互いによい関係を作るため、集団生活の重要性を理解し、社会的マナーに従った行動ができています。」と「異なる考えや立場の仲間を尊重し、支え合い協力することができています。」を高く評価する子どもが多いことから、年度が変わって新しい仲間や集団と過ごし始めて4ヶ月が経過した現時点で、**集団を維持する力はある程度備わっている**ことが考えられる。

### ○「社会参画」の観点から

「社会参画」の観点は、集団の成長のために自分で目標を決めて活動する力を確認するための観点であり、本実践で育成を目指す「自己解決力」や「集団と関わる力」と関係が深いものとなる。

アンケート結果では、この観点の評価が比較的低いことがわかる。特に、「集団で決めた活動目標の達成のために、個人的な目標を決め、活動に移すことができています。」では、学年が上がるにつれて顕著に評価が下がっていることがわかる。しかし、集団への貢献について問われている項目では比較的高い評価となっている学年もある。これらのことから、**役割として決められたことをやりきることが活動の目的となっており、集団の変化を求めて主体的に活動を生み出すという意識は低い**ことが考えられる。

### ○「自己実現」の観点から

「自己実現」の観点は、自分の能力を理解して、それを集団の中で発揮する力を確認するための観点で、本実践で育成を目指す「自己解決力」と関係が深いものとなる。

アンケート結果では、「社会参画」と同様に低めの評価が出ている項目が多い観点となっている。「社会的自立を目指し、個性を理解し活動に取り組むことができています。」と「集団の中で直面する課題に対して、必要な情報を収集、整理し、解決に向けて活動できている。」の評価がやや低めに出ているところから、**自分の能力でできることを把握したり、集団の課題解決に向けてその能力を発揮しようとする態度に改善の余地がある**と考えられる。

以上のことから、本校の子どもたちは、**集団生活を成り立たせることはできるが、決められていることを守ることにより安定を求める姿勢（受身の姿勢）が強い**ことが考えられる。

このような実態を踏まえ、

- ・自分にできることで環境に変化を与えようとする態度
- ・必要な能力を仲間と補い合うことでより大きな成果を求めようとする態度

といった態度を育むことに留意しながら実践を進めていくことで、自分たちの力で進んで環境を変えていこうとする集団を目指していきたい。

**③ 教育支援の方針**・・・収集した現在の情報に加え、過去の実践経験や知見（失敗）なども踏まえ、教育支援の方針を記述する。

○過去の実践経験や知見から

昨年度は、指導の軸とする、リーダー指導と小集団指導に焦点を当て、年間を通して実践を行った。この実践を軸に、そこで得られた成果と課題を考慮しながら、個と集団を育てるための教育支援の方針について考える。

(1) 全員がリーダーという認識で活動する指導

集団を動かすために欠かせないのがリーダーと呼ばれる存在である。そして、多くの子どもが考えるリーダー像は、集団の前に出て指示を出したり、活動計画を考えて実行したりたりする人であり、集団を引っ張っていく存在という認識が強い。しかし、学校生活においてこの認識だけでは、「自分は人前に出ることが苦手」「活動を考えることが苦手」などの理由でリーダーから遠ざかっていく子どもが増えてしまう。その結果、一部のリーダーによって集団が動かされている状況が生まれることになる。

この状況では、学校生活において、多くの子どもが言われたことだけをやる受身状態になってしまうと考え、リーダーの認識を改めることとした。その認識とは、リーダーには「表舞台型」と「裏方型」が存在するということである。

表舞台型・・・話し方や動きなどで人の心を動かす演者のように、集団の前に出て直接的に集団を動かそう（引っ張ろう）とするリーダー

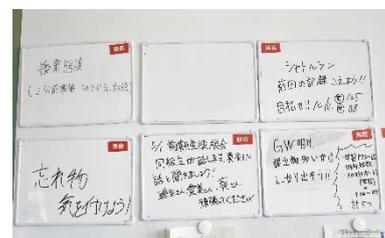
裏方型・・・音や光などで人の心を動かす照明や音響担当などのように、集団の前には出ないが、間接的に集団を動かそう（支えよう）とするリーダー

「リーダー」とは「導く人」であり、集団を目的地まで導く役割を担っているという考えのもと、どちらの型でも自分の役割を果たすことで集団を動かそうとしていることに違いはない。つまり、目的意識をもって自分にできることを提供することができる人がリーダーであり、学級内では全員がリーダーであるという指導を行った。

その結果、直接呼びかけをすることに抵抗を感じる子どもが、教室に設置してあるホワイトボードを使って伝えたい内容を掲示したり（図1）、1人1台ずつ配布されたタブレットを使って掲示物を作ったり（図2）と、裏方型として進んで集団を動かすために活動する子どもの姿が確認できるようになった。

従来のリーダーの認識のままでは受身の活動で終わってしまっていたかもしれない子どもが、自分が表現できる場所を見つけ、集団の成長に関わろうとする姿が見られたのは大きな成果であったと考える。

しかし、裏方型として一步踏み出すのが精一杯で、活動後に集団の変化を確認したり、状況に応じて次の一手を打ったりという姿はほとんどなかった。この姿は、表舞台型でも見られる姿であり、集団の目的地（結果）を意識させることと、そこまで導くための過程の創り方をより丁寧に指導する必要性を感じた。



【図1 ホワイトボードに書かれた連絡事項】



【図2 タブレットで作られた掲示物】

## (2) 集団で成果を出す指導

学級経営をしていく中で、学級という単位を成長させることだけに集中しすぎると、どうしても一部の表舞台型のリーダーに頼ってしまい、多くの人が引っ張ってもらっている状態が生まれてしまう。その結果、引っ張ってくれるリーダーありきの集団、言い換えれば、活動に対して受身の集団になってしまい、他人任せや指示待ちの状態が当たり前になってしまう。そのような状態では、1人1人が問題を見つけ、解決していく力は身についていかない。

そこで、大きな集団の成長は、小さな集団の成長の結果であるという考えのもと、学級の中で4～5人程度で構成される「班」という集団に注目して実践を行った。学校生活の中で、授業中の交流や掃除の時間、給食の時間など各種活動において班単位で動くことが多い。その**班が自立して変化できるようになることが、自分たちで変化していける学級に繋がる**と考えた。また、班という小集団だからこそ、1人1人の責任の配分も大きくなり、個の成長にも繋がりやすいと考えた。

ここで目指した班の姿は、**情報を共有し自分たちで行動の結果を変えていける姿**である。そのために、毎日15分程度で行われる朝、帰りの会の中で位置づけられている班会の方法を改善することにした。子どもの班会への捉えは、班長という役割の人からその日の目標を聞いたり、その振り返りを聞いたりする時間であった。この時間を、意図的にコミュニケーションを生む時間にすれば目標の姿に近づけるのではないかと考え、班会の方法を次のように変更した。

【変更前】 (図3)	【変更後】 (図4)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 班長の話が終われば班会は終わり。</li> <li>・ 座った状態で、何となく班長を見て聞く。</li> <li>・ 班長だけが話す。</li> <li>・ 話す内容は目標（朝）と振り返り（帰り）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 時間は3分。時間が来るまで話し続ける。</li> <li>・ 立った状態で、体を向き合わせて話し合う。</li> <li>・ 全員で話す内容を探す。</li> <li>・ 話す内容は必要に応じて決まる。</li> </ul>

他にも、所属意識を高めるために班会の初めに班長が班員の名前を呼んで返事をする活動を取り入れたり、話す内容に困らないように確認するとよいことリストを配布したりするなど、変更を加えた。そして、この班会の合言葉を「3分で成果を出す集団へ」とし、この時間で行動の結果に変化を出せるような班会を目指した。



【図3 変更前の班会の様子】



【図4 変更後の班会の様子】

その結果、まずは立ち姿勢と3分間という時間設定が活発な意見交流を生み出すことに繋がった。その中で提出物について話題にすることで、普段忘れ物が多かった子が安定して出せるようになった班や、自分たちの給食当番としての動きについて話題にすることで、給食の配膳時間を改善した班の姿など、問題を成果へと変えていく班の姿を見ることができた。これは班の中で情報を共有することで自分たちの行動結果を変えることができた成果であると考え。また、年度の後半になるにつれて、仲間の役割活動についてアドバイスをする姿や他の班とも関わろうとする姿があり、集団の繋がりを意識した活動になったことも成果である。

そして、さらに集団を成長させるには「共有」という部分の質を高めていく必要性を感じた。成果を共有することで自分も同じような活動に取り組んだり、課題を共有することで役割に関係なくその課題解決に取り組んだりできるようになれば、自分たちで問題解決をしていける集団になると考える。

## ○教育支援の方針

### ① 計画的に集団を成長させるための学級経営に関する年間指導計画の工夫

子どもの実態によって学級集団の状況は異なるが、段階を追いながら活動を仕組んでいくことで、どんな集団でも成長の方向に向かっていくことができると考える。そのためには、集団の発達段階を考慮しながら、定期的に目標ラインを上げていく必要がある。しかし、目の前に置かれている状況だけで目標ラインを決めていると、最終目標とする姿までたどり着けないという状況に陥ることが多々ある。そこで、『長尾彰（2019） 宇宙兄弟今いる仲間であまくいくチームの話』の中に記載されている「チームの発達段階とは」を参考に、役割活動を重要視した学級経営に関する年間指導計画を整えることで、計画的に集団を成長させるための活動が仕組めるようにしていく。

### ② 自分の能力について考え、集団との関わりの中で活動の幅を広げようとする学習計画の工夫

仲間と関わって活動するということは、能力を提供したり、されたりしながら足りない部分を補い合うことで成果を出すということである。しかし、それぞれに役割が割り振られていることによって、自分の能力ではなく、役割に固執して活動範囲を狭めてしまう人が多い。もちろん役割を全うすることは大切にしてほしい姿ではあるが、幅広く活動することで、経験値を増やしてほしいという思いが強い。そこで、それぞれの能力を発揮することに重きを置いた活動ができるように学習計画を考え、定期的実践することで、それぞれのよさが生かせる集団を目指せるようにする。

### ③ 結果を意識するための活動過程の記録と現在地を共有するための ICT 活用の工夫

結果を求めて活動を行うためには、目的地（目標となる姿）と現在地との差を把握する必要がある。そのために、活動過程を記録していける仕組みを整える。また、その状況を仲間と共有することで、活動に対する義務感や使命感が生まれ、自主的に活動に励むきっかけとなるのではないかと考える。さらに、情報を共有している仲間への応援や協力へと発展していく活動にも期待ができる。そこで、情報を記録、共有する方法として ICT を活用する。いつでも、どこでも情報が確認でき、同時にフィードバックもできるという点で ICT 活用の可能性を探っていく。

④ **実行計画と準備状況**・・・教育支援の方針をもとに、「自分がいつ、何をどのように行うのか」具体的な実践や行動に落とし込み、来年度以降の実行計画と準備状況を明確に記述する。

具体的な工夫のキーワード	・段階的な成長を見越した年間指導計画 ・活動環境を変える学習計画 ・情報の蓄積、共有のための ICT 活用
--------------	--

#### ① 計画的に集団を成長させるための学級経営に関する年間指導計画の工夫

先に記述した『長尾彰（2019） 宇宙兄弟今いる仲間であまくいくチームの話』の中で「チームの成長には、4つの段階（ステージ）がある」と述べられている。具体的には、「形成期」「試行錯誤期」「規範期」「達成期」となっており、この記述をもとに各ステージに対して3ヶ月ずつの期間を割り当て、各月の重点活動テーマと子どもの目指す姿を設けることで、1年を通して集団を成長させる指導計画を考える。

#### 【役割活動を重要視した年間指導計画】

第1ステージ	4月～6月	【集団の土台】
<b>【形成期】</b> お互いのことが分からない、自分の役割がはっきりしていない状況の中で、与えられた目標に向かって活動する。	<b>【4月】「仲間への理解」</b> ・会話の量を増やして仲間を理解できる。	仲間との壁を取り除き、学校生活への安心感を得る期間。決まった仕事をやりきらせることで、 <b>集団の中での必要性を感じられる指導</b> を大切ににする。
	<b>【5月】「役割の把握」</b> ・与えられた役割を果たして所属感がもてる。	
	<b>【6月】「役割の定着」</b> ・任された活動に責任感をもって取り組める。	
第2ステージ	7月～9月	【活動の量】
<b>【試行錯誤期】</b> 仲間の意見が表に出始めることで、対立することもある。与えられた目標ではなく、自分自身が立てた目標に向かって活動する。	<b>【7月】「活動成果の確認」</b> ・活動を振り返る中で達成度を確認できる。	成長するために必要な経験値を得るために、活動の量を増やす期間。現状から短期と長期の目標を考え、 <b>目標を達成するために活動を改善していく指導</b> を大切ににする。
	<b>【8月】「活動の見直しと改善」</b> ・達成度をもとに、目標設定ができる。	
	<b>【9月】「活動の再開発」</b> ・目標達成に向けて活動を考案、実行できる。	
第3ステージ	10月～12月	【活動の質】
<b>【規範期】</b> 情報共有が進むことで役割やルールが明確になり、学級内の活動目的や目標を自分ごととして捉えて活動する。	<b>【10月】「活動情報の収集」</b> ・仲間からの情報をもとに活動を修正できる。	限られた時間の中でより大きな成果を出すために、活動の質を高める期間。 <b>必要性のある活動を仕組んだり、仲間と活動の規模を大きくしたりする指導</b> を大切ににする。
	<b>【11月】「活動の精選」</b> ・求める成果を考慮して、活動を選択できる。	
	<b>【12月】「繋がりをもった活動」</b> ・仲間の助けを得ながら活動規模を拡大できる。	
第4ステージ	1月～3月	【考え方の質】
<b>【達成期】</b> 自立した行動と話し合いにより意思決定された活動の成功体験を共有し続けることで、自己解決型の集団として活動できる。	<b>【1月】「個性を知る活動」</b> ・仲間と関わりながら自分のよさを理解できる。	仲間との関わりを増やすことで、自分の存在意義を考える期間。貢献方法は人それぞれであることに気づかせるために、 <b>自分の能力に注目させる指導</b> を大切ににする。
	<b>【2月】「役割を超えた活動」</b> ・仲間と協働して自分の活動範囲を拡大できる。	
	<b>【3月】「活動軸を把握した活動」</b> ・状況に応じて自分にできることで貢献できる。	

この年間指導計画では、第1、2ステージ期の集団を「グループ」、第3、4ステージ期の集団を「チーム」として捉えて作成している。それぞれの捉えを以下に示す。

グループ・・・足し算で成り立つ集団。誰かが機能していなくても、一部の成果によって集団が成り立っている状態。活動が成り立たなくなることはないが、大きな成果は見込めない。

チーム・・・掛け算で成り立つ集団。1人1人の能力が関わることで活動規模や成果を拡大できる状態。活動規模が大きい場合、機能していない人がいると活動が成り立たなくなる。

集団を成り立たせる仕組みを変えていくことで、集団の成長へと繋がるように計画を考えた。

グループ期では、個の力を高めることに焦点を当てることで、自分の役割において成果を出せる組織を構築する。その中で「準備・実行・評価」を短いスパンで行い、目標達成までの活動の流れ（過程）を定着させていく。

チーム期では、集団の中で個の力を発揮することに焦点を当て、役割に関係なく、集団が抱える問題を自分たちで解決できる組織を構築する。その中で、自分の能力を知り、自分の力を提供しようという姿勢だけではなく、必要な力を仲間から提供してもらうという姿勢も身につけていく。

このように、個から集団へ、グループからチームへという段階的に成長を見越した指導計画を立てることで、チームの現状を確かめながら活動が仕組んでいけると考える。

## ②自分の能力について考え、集団との関わりの中で活動の幅を広げようとする学習計画の工夫

集団の中で自分の能力を生かすためには、自分ができることについて考える時間や、実際に実行する時間を確保するなど、自分に気づく過程が必要であると考えられる。自分に気づくタイミングは、普段の生活の中に多々存在している。しかし、生活環境が変化しないと活動も作業化してしまい、自分に多くを求めなくても一定の成果が出せてしまう。そのため、自分と向き合おうとしなければ、特に大きな気づきを得ることはできない。そこで、意図的に活動環境を変えることで自分のよさを引き出したり、仲間との関わり方を考えたりできるように学習計画を考える。この学習計画の概要は、自分たちが発見した複数の問題に対して、役割に関係なく自分が解決したいと思う問題を選択し、同じ選択をした仲間とそこでチームを組んで活動するというものである。計画の詳細は以下に示す。また、この学習の評価規準を明確にするために、『文部科学省（2020）「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 中学校 特別活動』から、今回特に重要視している「社会参画」に重点を置いた評価例を引用する。

### 【評価規準】

集団の一員として活動するために必要な知識・技能	集団や社会をよりよくするための思考・判断・表現	よりよい社会の形成に向けて主体的に自己を生かす態度
学級・学校集団の中で他者と協力して役割を果たすことの意義を理解し、そのための話し合いの進め方を身に付けている。	学級・学校生活の向上のために問題を発見し、集団としての解決方法を合意形成したり、個人としての実践目標を意思決定したりしている。	現在及び将来の自己の活動や役割を振り返ることで、成長や問題を認識し、これからの集団生活の改善に生かそうとしている。

## 【意図的に活動環境を変える学習計画】

	子どもの活動	指導上の留意点	目指す子どもの姿
学習計画①	1. 集団の様子から活動テーマを収集する。 2. 収集した活動テーマを精選する。	○複数の活動テーマから自分が解決したい問題を選択できるようにすることで、自発的に活動に参加できるようにする。	○現状の姿から目指す姿までの差を把握して問題を探そうとしている。 <b>【思考・判断・表現】</b> (問題提示の内容)
学習計画②	3. 自分が取り組みたい活動テーマを選択する。 4. 新たなチーム(同じ活動テーマを選んだ仲間)で活動の方向性を話し合う。 ・集まったメンバーの中で進行役を決め、話し合いを進めていく。 5. 活動内容(方向性)をまとめ、ワークシートに個人の役割を記入する。 6. チームごとに活動の方向性を発表する。	○1つの活動テーマに人数が偏らないように見届け、場合によっては問題解決に必要な人数について考えさせる。 ○話し合いの方向性が定まらないチームに対して、現状の姿の把握と問題解決後の姿を考えさせる。 ○自分の役割が定まらない生徒に対して、リーダーの認識を確認しながら自己表現の方法を考えさせる。 ○ワークシートに具体的な活動内容を記入させることで、自分の役割を把握できるようにする。 ○各チームの発表を聞くことで、活動内容は違って、1つの活動テーマに向かってそれぞれが活動しようとしている状況が把握できるようにする。	○新しくできたチームをまとめ、円滑に話し合いを進める方法を身に付けている。 <b>【知識・技能】</b> (行動の観察) ○話し合いの中で自分にできることを提供し、問題の解決に貢献しようとしている。 <b>【自己を生かす態度】</b> (発言の内容) ○話し合いを通して、問題を解決するための自分の役割を見出している。 <b>【思考・判断・表現】</b> (ワークシート)
学習計画③	7. チームごとに活動の準備をして実行に移す。 (活動期間は2週間程度とし、そこまでの活動結果で振り返りに移る。)	○各チームで準備物や活動方法、活動期間が異なるため、チーム責任者を決めて現状確認をこまめに行う。 ○1人1人が活動に参加していることを見届け、活動が滞っているところには助言をする。	○自分の役割を把握し、問題の改善のために活動しようとしている。 <b>【自己を生かす態度】</b> (行動の観察) ○問題解決に向けて、目標をもって活動している。 <b>【思考・判断・表現】</b> (行動の観察)
学習計画④	8. 活動の振り返りを行い、成果や課題を共有する。	○目標の達成度(環境の変化率)を意識させ、その結果にどれだけ自分が関わったのかを振り返らせる。 ○仲間の貢献度にも注目させ、チームで成果を出す活動の意義について考えさせる。	○自分や仲間の活動を振り返り、これからの集団生活の改善に生かそうとしている。 <b>【自己を生かす態度】</b> (ワークシート)

この学習計画は、自分や仲間、集団に対する見方や考え方の変化を探りながらの活動となるため、複数回実行する必要がある。また、1回の実行期間も考慮して、活動時期は、先に記述した年間指導計画にある第2～4ステージの中で1回ずつ行うことが妥当だと考える。このような意図的に環境を変化させ、自分たちが掲げる目標の達成に向けて力を出し合う活動が、自走する組織に繋がると考える。

### ③ 結果を意識するための活動過程の記録と現在地を共有するための ICT 活用の工夫

集団生活を向上させるためには、役割をもった1人1人の活躍が必要である。ここでいう活躍とは、活動を実行したことに満足するのではなく、実行した先に出た結果を分析し、目標達成に向けて活動し続ける姿勢を示す。このような姿勢を維持するためには、目的地となる最終目標と現在地との差を常に意識できるように活動過程を記録したり、現在地を共有して集団の動きを認識したりできる環境が必要だと考える。そこで、「記録の蓄積」「現在地の視覚化」「情報の共有」を満たすために、子ども1人1人に配布されているタブレットを使用する。また、その中に入っている『SKYMENUクラウド』というソフトを使用して実践を行う。具体的な方法を以下に示す。

#### ・活動過程の記録と現在地を視覚化する仕組み

スカイメニューの機能の1つである「発表ノート」を使用して、活動の記録を行う。後に共有することを考慮して、子どもたちが共通した環境で記録ができるようにテンプレートを準備する(図5・図6)。

まずは、活動を行うための準備として、目的地と現在地を明確にする必要がある。そのために、図5にある「目標の姿」と「現在の姿」にそれぞれの活動目標と現状を書き入れる。そして、目標と現状との差を埋めるための活動を考えて実行に移す。

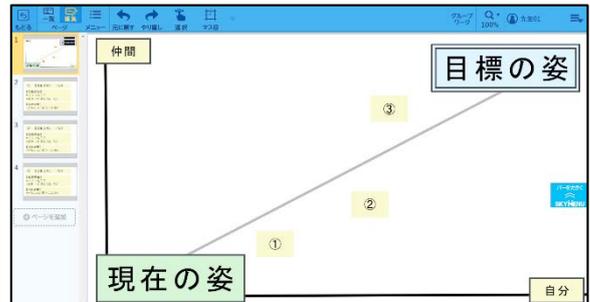
次に、実行した活動を「活動目的」「活動内容」「活動結果」の3つの項目に分けて記録する(図6)。また、複数活動が行われることを考えて、活動番号も記入していく。活動記録をできるだけ具体的に記述することで、現在地の把握がより明確にできるようにする。

最後に、活動後の現在地を視覚的に把握するために、発表ノートの中に活動番号を位置づける(図5)。また、活動結果には「自分の変化」と「仲間の変化」があることにも注目して番号を位置づけることで、どの方向に向けた活動を仕組みばよいのか考えられるようにする。番号を位置づけた場所が新たな現在地となり、そこから目標達成に向けた活動を考え直したり修正したりしていく。

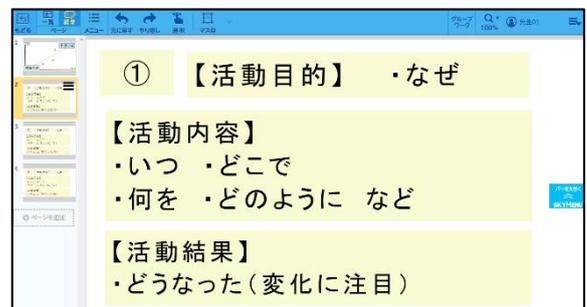
#### ・情報を共有する仕組み

記録した発表ノートは、同じフォルダに提出させることで、その提出物を学習者同士で確認することができる(図7)。これで情報共有は可能ではあるが、子どもがその記録にリアクションをすることはできない。そのため、記録へコメントをしたり、複数で同じ活動に取り組んだりする場合は、活動ごとにグループを作り、発表ノートにある「グループワーク」という機能を使用することで、発表ノートを共有して修正できるようにする。

今回の実践計画をもとに、自分たちで未来を創造する子どもたちの育成に励んでいきたい。



【図5 目標・現状・現在地を把握するノート】



【図6 活動を記録するノート】



【図7 情報を共有する画面】